

## 無常迅速



東京女子医大 専務理事 名誉教授 浜野 恭一

私にも少しは宗教心がある。しかし信仰に入るといふほどのことは無く、いろいろな宗教の回りをグルグル回っている程度である。仏教は当然、一番身近なものであるが、現代の坊さんは嫌いで、近づいたことはない。

立正佼成会付属の佼成病院院長の時に、折角宗教法人につとめたのだからと思って、法華経の本や、開祖の伝記に少し親しんでみた。その折に、「この世はすべて無常である。現在の状態も、一秒でも過ぎたらもとに戻るといふことはない。常なるものは何も無いのである。」という文章を読んだ。無常という言葉は、祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり。という平家物語の冒頭から始まり、西行、芭蕉の例を引くまでもなく、日本人の琴線にふれる言葉で、漠然たる悲哀感として遺伝子に組みこまれているように思われる。

標題にあげた無常迅速は、道元の言葉として、正法眼蔵随聞記にしばしば出てくる。無常が迅速であるといふことは、感性としては理解出来るが、無常すなわち、万物は生滅流転し、永遠に変わらないものは一つもない。ということと、それが迅速であるといふことは、少し違和感があつて私にはどうも分からなかった。私には無常迅速なりという言葉は、光陰矢の如しとほぼ同じであり、したがって、無常=時であると考えても好いのだろうと長い間思っていた。もっとも、時間とは何かということの本気で考えると発狂するそうであるし、この命題を一生考えつづけたギリシアの哲学者もいたとのことである。愚鈍なる私は勿論そんな所には深入りしない。年をとると段々ずるくなつてきて、時間を見方にするをおぼえてくる位である。「ほっぽらかして置きなさい。」という

のは私の得意な科白であるが、どちらかといえば最近おぼえたやり方である。時間が解決してくれるといふことを、ある畏れをもって理解するには70年以上かかったなとしみじみ思う。

さて本題に戻る。「無常迅速」といふ題をつけたために、もう一度、正法眼蔵随聞記を読み返す羽目になった。以下退屈とは思いますが、我慢して下さい。

道元の無常迅速には、人はあつという間に死んでしまう。人の命は真にはかない。という意味が濃厚にこめられているようである。無常という言葉も、私が単純に感じていた概念ではなくて、真理そのものととらえられている。

「此の志しをおこす事は切に世間の無常を思うべきなり、此の事は亦只仮令の観法などにすべきことにあらず。亦無きことをつくりて思ふべきことにあらず。真実に眼前の道理なり。人のおしへ、聖教の文、証道の理を待つべからず。朝に生じて夕べに死し、昨日みし人今日はなきこと、眼に遮ぎり耳にちかし。是は他のうへにて見聞することなり。我が身にひきあて、道理を思ふに、たとひ七旬八旬に命を期すべくとも、終に死ぬべき道理に依て死す。……中略…… 此の道理真実なればこそ、仏も是れを衆生の為に説きたまひ、祖師の普説法語にも此の道理のみを説る。今の上堂請益等にも、無常迅速生死事大と云ふなり。返返すも此の道理を心にわすれずして、只今日今時ばかりと思ふて時光をうしなはず、学道に心をいるべきなり。其の後は真実にやすきなり。性の上下と根の利鈍は全く論ずべからざるなり。」和辻哲郎博士の解釈によれば、世間の無常は思索の問題ではない。現前の事実である。朝に生まれたものが夕に

死ぬ。昨日見た人が今日はいない。我々自身も今夜重病にかかり、あるいは盗賊に殺されるかもわからない。もしこの生命が我々の有する唯一の価値であるならば、我々の存在は価値なきに等しい。とある。だからこそ、すべてを捨てて学道（仏道）にはげめというのが道元の根本思想であろう。性格が好かろうが悪かろうが、頭が好かろうが悪かろうが、そんな事は全く問題にならないというのは救いではあるが、そのきびしさと精神的気魄には、とてもついてゆけない気もする。このきびしい求道精神は万人を対象とする宗教であろうかという気がしないでもない。鎌倉時代という、多くの宗教が興隆した緊張の時代、当時の日本最高の頭脳と考えられる名僧達を考えるとうなずけないでもないが。

「我自ら思はく、たとい発病して死すべくとも、なほ只是れ（学道）を修すべし。病ひ無ふして修せず、此の身をいたはり用いてなんの用ぞ。病ひして死せば本意なり」。人命は地球より重しなどと馬鹿なことを言う宰相がいたり、なにより健康第一でサプリメントが氾濫し、病院で死んだら、まず医療を疑えなどという末世に住んでいると、道元の言葉は胸がすくようである。随聞記は名文で書かれているが、彼自身は文章を気どって書く必要もないし、学殖を誇るなどもつてのほかと述べている。修するのは唯「仏祖の行履」つまり釈尊の言行のすべてであって、他の事はすべて無価値なのである。この思想は武士道にも影響しているのかなと思ったのは、葉隠の一節である。或人が、「武士にして一芸に秀でたものをどう思うか」と作者の山本常朝に問うた所、「左様なものは武士には

あらず、芸者なり」と一言に斬り捨てている。

無常迅速を、この世で滅びないものはない。および、光陰は人を待たず。という風に分解してしまうと、これはいずれの宗教にも内在している考えであろう。聖書にも「人はみな草のごとく、その光栄は草の花に似たり。草は枯れ、花は落ちる。」という言葉がある。私は曾野綾子の小説が好きで、キリスト教の知識はその受売りになってしまうが、「人生とは、もともと不幸なものなのだ。」「全能の神は、自分のすべてを知っていてくれる。従って神と契約を結んでいけば、この世でいかに誤解されようが、ひどい目に遭おうが、心身を労することはない。」という様な考えは、やすらぎを与えてくれる。道元の教えには、とても無理でついてゆけないが、神には救ってもらえるのではないかと都合よく考えている。ただ聖書は難解なうえ膨大で、私には読み通す力がない。愛と許し。明日を思いわずらうこと勿れ。などの断片を頭にきざみ込む程度である。昔、小学校の時に、戸谷先生という恩師に、釈迦は慈悲を説き、キリストは愛を説き、孔子は仁を説いた。と教わったことがある。分からぬながら感銘して、ノートに書きつけておいた覚えがある。いずれも類似性があり、本質的な宗教の類似性と違いについて勉強したい気もあるが、とても無理だと分かっている。孔子の「仁」などという思想も、分かっているようで何が何だか分からない。孔子は弟子の能力によって教え方を変えており、顔回と違って、子貢には、生涯行う価値のあることとして、「それ恕か。己れの欲せざる所を人に施すこと勿れ。」と言っている。私も、この位のところを心掛けたいと考えている。